

科目概要

心理臨床専攻 修士課程

心理臨床専攻修士課程 開講科目 □臨床心理基礎必修科目

科目名	臨床心理学特論	4 単位
担当者	高橋 蔵人（前期）、河合 裕子（後期）	
テーマ	臨床心理学の領域と実践	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理学、臨床心理学面接、臨床心理学査定、臨床心理学的地域援助、心理臨床における倫理 <内容の要約> 心理臨床の実践に入る前に、心理臨床の基礎としての理論および実践領域における実態について学ぶ <学習目標> 臨床心理学の多様な理論・領域について、基本的な理解ができる。 臨床心理学の主たる領域の実践における基本的態度が理解できる。	
	前期は、高橋が担当し、専門家としての職責・基本姿勢と心理面接を行う上での枠組み、対象理解および援助法について広く学んでいく。またレポート発表や具体的事例を通して、臨床実践および連携の方法について理解を深める。 後期は、河合が担当し、臨床心理面接の理論と実践について理解を深めるために、心理面接で必要となる臨床的な考え方や姿勢を学び、親子面接や子どもの心理面接の実践について、事例検討やディスカッションをとおして理解を深める。 前期 第 1.2 回 「臨床心理学の原則」「クライアントを理解する視点と方法」 第 3.4 回 「臨床心理学の見方、考え方」「クライアントに会う」 第 5.6 回 「クライアントを理解する」「クライアントを査定する」 第 7.8 回 「病態水準論」「手助けの方針を決め、クライアントに伝え、合意する」 第 9.10 回 「クライアントにかかわる」「かかわりながら考え続ける」 第 11.12 回 「クライアントの自己理解と自己修復を助ける」「心理療法における「こころ・からだ」の作業」 第 13 回 「クライアントと共に歩き続ける」 第 14、15 回 事例の提示とまとめ 後期 第 1～3 回 心理面接の実践における基本的態度 面接構造 記録 SV 第 4～6 回 心理面接の進め方 受理面接 見立てと方針 引き継ぎ・終結 第 7.8 回 心理面接におけるジレンマと危機対応 枠をめぐって 第 9.10 回 親子面接の実践 家族並行面接 家族同席面接 第 11.12 回 遊戯療法の理論 歴史 アセスメント 第 13.14 回 遊戯療法の実践 箱庭療法 描画療法 第 15 回 事例検討 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	発達心理学、青年心理学、社会心理学、学習心理学、乳幼児心理学、老年心理学などの臨床心理学の基礎となる理論や知見に関する知識を前提として講義する。	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ、心理療法特論、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ - ①②	
テキスト	（前期）渡辺雄三『私説・臨床心理学の方法』金剛出版、2011 （後期）資料を配布する	
参考文献	渡辺雄三・山田勝・高橋蔵人・石黒直生（編）『クライアントと臨床心理士』金剛出版、2016 土居健郎『新訂方法としての面接』医学書院、1992 成田善弘『新訂増補精神療法の第一歩』金剛出版、2007 東山紘久・伊藤良子『遊戯療法と子どもの今』創元社、2005 広中正美『遊戯療法と子どもの心的世界』金剛出版、2002 の構造 村瀬嘉代子『子どもと家族への統合的心理療法』金剛出版、2001 村瀬嘉代子 新訂増補『子どもの心に出会うとき』金剛出版、2020	
成績評価 方法と基準	授業態度（25%）・議論への参加（25%）・レポート等（50%）で評価し、全体で 60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理面接特論Ⅰ（心の支援に関する理論と実践）	2単位
担当者	高橋 蔵人	
テーマ	臨床心理面接の基礎を学ぶ	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理面接、面接技法、事例理解（見立てと方針）、治療構造 <内容の要約> 「臨床心理面接特論Ⅰ」は1年次前期開講の必須科目である。この授業では、心理専門職の業務のひとつである臨床心理面接について、特に、理論とその背景、基本的態度、見立てと方針などを臨床事例を通して実践的に学ぶ。 <学習目標> 心理面接の理論と技法、および基本的考え方と姿勢を理解し説明することができる。 クライアントの特性や水準に応じた支援やさまざまな状況への対応を学び、適用できる。心理面接を行う上での原則や倫理的諸問題を理解し説明することができる。	
授業の進め方	授業では臨床心理面接の理論と実践について理解を深める。講義を中心に各テーマに関する発表とディスカッション、事例検討などを行う。 第1.2回 心理面接の歴史的背景と基本 第3.4回 心理療法①精神分析・力動的心理療法1 第5.6回 心理療法②精神分析・力動的心理療法2 第7.8回 心理療法③家族療法 第9.10回 心理療法④集団療法・嗜癖臨床 第11.12回 心理療法⑤行動理論・認知行動療法・応用行動分析 第13.14回 心理療法⑥統合失調症の心理臨床 第15回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	臨床心理学の基本的な知識を前提として、心理面接の実践を学ぶ。参考図書や文献、資料をよんでおくこと。積極的なディスカッションで理解を深めること。	
本科目の 関連科目	臨床心理面接特論Ⅱ、臨床心理学特論、心理療法特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ―①②	
テキスト	使用しない。適宜資料を配布する。	
参考文献	土居健郎『新訂方法としての面接』医学書院、1992 Freud, S. <i>Studien über Hysterie</i>, 1895／芝伸太郎（訳）『ヒステリー研究. フロイト全集2』岩波書店、2008 Freud, S. <i>Bruchstück einer Hysterie-analyse</i>, 1905／渡邊俊之・草野シュワルツ美穂子（訳）『あるヒステリー分析の断片〔ドーラ〕. フロイト全集6』岩崎書店、1969 成田善弘『新訂増補精神療法の第一歩』金剛出版、2007 滝川一廣「精神療法とはなにか」 星野弘他『治療のテルモピュライ：中井久夫の仕事を考え直す』星和書店、1998 渡辺雄三『精神分裂病者に対する心理療法の臨床心理学的研究』晃洋書房、2003 渡辺雄三・山田勝・高橋蔵人・石黒直生（編）『クライアントと臨床心理士』金剛出版、2016 その他にも授業内で適宜紹介、解説する。	
成績評価 方法と基準	授業態度（25%）・議論への参加（25%）・レポート等（50%）で評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理面接特論Ⅱ	2 単位
担当者	福元 理英	
テーマ	臨床心理面接の実践を学ぶ	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理面接、臨床心理アセスメント、クライアントーセラピスト関係、セラピストの資質、クライアント理解 <内容の要約> 心理臨床の専門業務のひとつである臨床心理面接について、面接に求められるセラピストの資質とさまざまな面接技法、クライアントーセラピスト関係、クライアントの心的世界の理解や見立てなど、その実践について学ぶ。 <学習目標> 臨床心理面接の実践における基本的知識・態度および専門的資質を修得できる。セラピストとしての自分の特徴に気づき、臨床心理面接に活かすことができる。事例を通じて、臨床心理面接の実践を想定することができる。	
授業の進め方	授業は講義やワーク、ロールプレイ、ディスカッションを取り入れ、専門的知識や技術を知的に理解するとともに体験的に習得する。臨床心理面接の実践につながるよう理解を深める。 第1・2回 臨床心理面接に求められるセラピストの資質 第3・4回 臨床心理面接における観察と想像の区別、心的現実 第5・6回 臨床心理面接におけるイメージと表現、象徴的理解 第7～14回 さまざまな臨床面接技法と臨床実践例を学ぶ 第15回 振り返り・まとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	○参考文献に挙げた図書を自習すること。 ○授業で学んだことや感じたことは、授業後忘れないうちに書き留めておくこと。 ○知識として頭で理解するだけでなく、自身の体験をもって深く学ぶ姿勢で臨んでほしい。	
本科目の関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ、臨床心理学特論、心理療法特論、臨床心理実習Ⅰ	
テキスト	使用しない。適宜レジュメを配布する。	
参考文献	竹内健児（2015）『Q&Aで学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社 松木邦裕（2015）『耳の傾け方 心の臨床家を目指す人たちへ』岩崎学術出版社 村瀬嘉代子（2018）『ジェネラリストとしての心理臨床家』金剛出版 田中千穂子（2021）『ここで関わりここをつかう』日本評論社 東畑開人（2023）『ふつうの相談』金剛出版 その他、授業内で適宜紹介する	
成績評価 方法と基準	評価方法は、授業への参加度や課題等への取り組み姿勢（主体的・積極的）60%、レポート40%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。なお、2/3 以上の出席がない場合は評価の対象とならない。	

科目名	臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）	2単位
担当者	辻野 達也	
テーマ	心理検査を通して、被験者の心理的問題を含む行動や性格傾向を理解する。	
科目のねらい	<キーワード> 臨床心理査定，心理検査，援助計画 <内容の要約> 臨床心理査定は、臨床心理面接と同様に心理職（公認心理師、臨床心理士）の職務のひとつであり、その目的は援助対象者の行動特性や性格傾向をトータルに把握し、支援に役立てることである。 本演習では、臨床心理査定における主に心理検査について、実施法や結果の処理、解釈を学び、被験者への援助方策や計画を立てることができるようになることを目指す。また、心理検査をおこなう上での倫理的事項についても学ぶ。 <学習目標> ・さまざまな心理検査についての専門的知識・技法を習得し、主たる心理検査の実施、結果の処理、解釈、報告することができる。 ・心理検査を通して、クライアントの抱える心理的問題を見立て、適切な援助方策や計画を立てることができる。 ・心理検査をおこなう上での倫理的諸問題を理解することができる。	
授業の進め方	乳幼児から高齢までのさまざまな人々を対象に、知的側面、発達の側面、性格面、認知心理的側面の査定について代表的な心理検査の理論と実際を、演習を通じて学ぶ。 第1回 オリエンテーション 第2回 臨床領域と査定、検査の導入とテストバッテリー 第3～6回 投映法（描画検査：バウムテスト・風景構成法） 第7～8回 投映法（描画検査：人物画・家族画、SCT、P-Fスタディ） 第9～12回 知能検査法（WISC） 第13～14回 質問紙法（Y-G検査、MMPI、その他） 第15回 発達障害と心理査定（AQ、PARS-TR、ADI-R、その他）	
事前学習の内容 学習上の注意	各検査の実施法や解釈法を習得するために、授業以外や授業期間後も自主学習に努めること。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅱ、投映法特論	
テキスト	授業内で資料を配布する。	
参考文献	内容が多岐にわたるため、必要な文献は授業内で適宜紹介する。 ・A・プリフィテラ他編（2012）『WISC - IVの臨床的利用と解釈』日本文化科学社 ・E・O・リヒテンバーガー他（2008）『エッセンシャルズ心理アセスメントレポートの書き方』日本文化科学社 ・カレン・ポーランダー（1999）『樹木画によるパーソナリティの理解』ナカニシヤ出版 ・カール・コッホ（2010）『バウムテスト（第3版）—心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房 ・下山晴彦・黒田美保編（2016）『臨床心理学第16巻第1号—発達障害のアセスメント』金剛出版 ・津川律子（2010）『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房 ・上野一彦、松田修、小林玄、木下智子（2015）『日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント-代表的な指標パターンの解釈と事例紹介』日本文化科学社 ・山中康裕編（1984）『中井久夫著作集 別巻(1) H・Nakai 風景構成法』岩波学術出版社	
成績評価 方法と基準	各テーマにおける課題レポート（60%）および授業への取り組み姿勢（40%）により評価し、全体で60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理査定演習Ⅱ	2 単位
担当者	早川すみ江	
テーマ	心理検査の中でも主に投射法検査を通して、被験者の心理的問題を含めた行動やパーソナリティを深く把握、理解する。	
科目のねらい	<キーワード> 1.臨床心理査定, 2.投射法検査, 3.ロールシャッハ・テスト, 4.パーソナリティ, 5.精神力動的理解 <内容の要約> 臨床心理査定は、臨床心理面接と同様、臨床心理士・公認心理師の重要な業務のひとつであり、その目的は、援助対象者であるクライアントの良い面も悪い面も含めた行動やパーソナリティをトータルに把握し、理解することである。 本演習では、臨床心理査定の中の、主に投射法検査であるロールシャッハ・テストについて、実施法や結果の処理、解釈法などとともに、検査をおこなう上での倫理的事項についても学ぶ。 <学習目標> ・ 心理臨床の基礎となる対人関係能力をふまえ、適切な態度で投射法検査の実施ができる。 ・ ロールシャッハ・テストについての専門的知識・技法を習得し、検査結果の処理について理解できる。 ・ 検査結果データの解釈を通して、クライアントの良い面も悪い面も含めた行動やパーソナリティをトータルに把握し、理解しようとのぞむことができる。 ・ 投射法検査をおこなう上での倫理的諸問題を理解することができる。	
授業の進め方	投射法検査の中のロールシャッハ・テストを取り上げ、検査の実施法から結果の処理の仕方および分析方法までを学習する。またロールシャッハ・テストの解釈仮説のベースとなる精神力動的な理解に基づく継起分析の方法を『精神力動論』をもとに学習する。 第 1 回：ロールシャッハ・テストとは 第 2～4 回：スコアリング法 第 5～6 回：実施法・実施法実習 第 7～8 回：結果の整理 第 9 回：形式分析 第 10～14 回：継起分析のための基礎知識および継起分析の方法 第 15 回：スコアリング確認	
事前学習の内容・学習上の注意	・ 紹介した専門機関でロールシャッハ・テストの被験者体験実習を行ってもらう。 ・ 指定テキスト『精神力動論』の発表担当者は、時間内に発表できるよう簡潔に章の内容をまとめ、説明し、質問に答えられるよう十分な準備をして臨むこと。発表担当者以外も、事前に『精神力動論』を読んでおくこと。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅰ、投射法特論	
テキスト	・ 『改訂 新・心理診断法』片口安史著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） ・ 『精神力動論』小此木啓吾・馬場禮子著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません）	
参考文献	・ E・O・リヒテンバーガー他著『エッセンシャルズ心理アセスメントレポートの書き方』2008 日本文化科学社 ・ 加藤志ほ子著『ロールシャッハ・テストの所見の書き方』2016 岩崎学術出版	
成績評価方法と基準	課題レポート（80%）および授業への取り組み姿勢（20%）により評価し、全体で 60%以上を合格とする。	

科目名	臨床心理基礎実習		2 単位																
担当者	辻野 達也、河合 裕子、高橋 蔵人																		
テーマ	心理臨床の基本的知識、技能、態度の体験的学習																		
科目のねらい	<キーワード> 面接技法、ロールプレイ、受面接、アセスメント <内容の要約> 「臨床心理学基礎実習」は1 年次開講の必須科目であり、心理臨床活動における倫理や姿勢を学び、心理面接に必要な基礎的能力、技術を養うことを目的とする。前期は、基本技能の要点を学び、心理臨床の基盤となる対人的構えや感情理解など自己理解を深める。後期は、主に、ロールプレイや試行カウンセリングを通して、事例の見立てや面接の経過について理解を深める。 <学習目標> 心理面接を行う上で必要とされる基礎的な知識・技能を身につけることができる。 基本的技能また学内実習施設において運営・受付実習を体験することで、今後の実際の面接への心構えが形成できる。																		
授業の進め方	授業の進行はグループ学習を基本とし、前期は面接に至るまでのさまざまな基礎技術や面接での応答技法を体験的に学び、後期に向けてロールプレイを用いた実習を行う。また、後期は、実際の面接場面について学ぶ。実際の面接場面でみられるような主訴や問題の設定・場面の設定によるロールプレイなどの実習、ディスカッションから面接の要点を学ぶ。後期には教員・研究員の面接陪席などの体験学習に入る。 <table><tr><td>第 1 回～第 2 回</td><td>前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法</td></tr><tr><td>第 3 回～第 8 回</td><td>ロールプレイ実習（応答練習）</td></tr><tr><td>第 9 回～第 13 回</td><td>ロールプレイの発表とディスカッション</td></tr><tr><td>第 14 回</td><td>前期の振り返りとまとめ</td></tr><tr><td>第 15 回</td><td>相談室実習オリエンテーション（7 月頃を予定）</td></tr><tr><td>第 16 回</td><td>後期オリエンテーション</td></tr><tr><td>第 17 回～第 29 回</td><td>ロールプレイの発表とディスカッション</td></tr><tr><td>第 30 回</td><td>後期の振り返りとまとめ</td></tr></table> その他、授業時間外に、ロールプレイ体験（カウンセラー役 3 回、クライアント役 3 回、計 6 回）を実施し、逐語録・面接記録を作成する。また、学内実習施設において、受付実習（電話応答実習）を体験する。			第 1 回～第 2 回	前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法	第 3 回～第 8 回	ロールプレイ実習（応答練習）	第 9 回～第 13 回	ロールプレイの発表とディスカッション	第 14 回	前期の振り返りとまとめ	第 15 回	相談室実習オリエンテーション（7 月頃を予定）	第 16 回	後期オリエンテーション	第 17 回～第 29 回	ロールプレイの発表とディスカッション	第 30 回	後期の振り返りとまとめ
第 1 回～第 2 回	前期オリエンテーション、カウンセリング基礎技法																		
第 3 回～第 8 回	ロールプレイ実習（応答練習）																		
第 9 回～第 13 回	ロールプレイの発表とディスカッション																		
第 14 回	前期の振り返りとまとめ																		
第 15 回	相談室実習オリエンテーション（7 月頃を予定）																		
第 16 回	後期オリエンテーション																		
第 17 回～第 29 回	ロールプレイの発表とディスカッション																		
第 30 回	後期の振り返りとまとめ																		
事前学習の内容 学習上の注意	学部で学んだ臨床心理学に関する授業を復習しておくこと。 実習の授業であることから、毎回の授業は積極的に参加すること。																		
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①																		
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。																		
参考文献	下山晴彦編『臨床心理学全書4 臨床心理実習論』誠信書房、2003 竹内 健児『Q & A で学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社、2015 津川律子『改訂増補 精神科臨床における心理アセスメント入門』金剛出版、2020 馬場禮子『精神分析的人格理論の基礎—心理療法を始める前に』岩崎学術出版社、2008 松木邦裕『耳の傾け方—こころの臨床家を目指す人たちに』岩崎学術出版社、2015 鏑幹八郎・名島潤慈編『心理臨床家の手引き 第4 版』誠信書房、2018 遠藤裕乃『ころんで学ぶ心理療法—初心者のための逆転入門』日本評論社、2003 渡辺雄三『私説・臨床心理学の方法—いかにクライアントを理解し、手助けするか』金剛出版、2011																		
成績評価 方法と基準	①授業への取り組み姿勢とディスカッションへの積極的参加 40%、②課題（発表資料、課題レポート）60%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。なお、前期 2／3 以上の出席、および後期 2／3 以上の出席がない場合は評価の対象とならない。																		

科目名	臨床心理実習Ⅰ－①（心理実践実習）		2 単位																																																										
担当者	河合 裕子・高橋 蔵人・辻野 達也・早川 徹 瀬地山葉矢（SV のみ）・早川すみ江*・福元 理英*・堀美和子*・牧野多恵子* *全体ケースカンファレンス、引継ぎカンファレンス、スーパーヴィジョンを担当																																																												
テーマ	学内実習を通して、心理臨床の知識と技能を習得する																																																												
科目のねらい	<キーワード> 学内実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス、アセスメント <内容の要約> 学内実習（本学の心理臨床研究センター（心理臨床相談室）での実習、学内教員によるスーパーヴィジョン、ケース・カンファレンスへの参加およびケース報告や検討等）を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していく力を養う。 <学習目標> 心理臨床における基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していくことができる。																																																												
授業の進め方	<table><tr><td>第 1 回</td><td>相談室打ち合わせ会</td></tr><tr><td>第 2、3 回</td><td>オリエンテーション</td></tr><tr><td>第 4 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 5、6 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 7、8 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 9 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 10、11 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 12 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 13 回</td><td>第 1 回 リサーチカンファレンス</td></tr><tr><td>第 14、15 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 16 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 17、18 回</td><td>講演会（シンポジウム）</td></tr><tr><td>第 19、20 回</td><td>ケース研究実習</td></tr><tr><td>第 21、22 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 23 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 24 回</td><td>第 2 回 リサーチカンファレンス</td></tr><tr><td>第 25、26 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 27 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 28 回</td><td>第 2 回 相談室打ち合わせ会</td></tr><tr><td>第 29、30 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 31 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 32、33 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 34 回</td><td>第 3 回 リサーチカンファレンス</td></tr><tr><td>第 35、36 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 37 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 38、39 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 40、41 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 42、43 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 44 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr></table> 【学内実習】 □原則として、学内心理相談室における 1 年次の実習は、6 月の学内実習説明会ののち、ケース担当実習を 30 時間程度担当すること。〔内訳：インテーク等の陪席、心理検査、心理面接等を 1～2 ケース（10 時間程度）以上担当。担当ケース 1 セッションにつき、事前・事後学習（準備、記録、検討等）を 1 時間程度行い、1 セッションにつき、スーパーヴィジョン 1 時間程度受けること。〕 □相談室の実習では、受付実習や陪席とともに、心理面接および心理検査を担当し、担当スーパーヴァイザーらによるスーパーヴィジョンを受ける。また実習内容について、学内実習日誌にまとめる。			第 1 回	相談室打ち合わせ会	第 2、3 回	オリエンテーション	第 4 回	全体ケースカンファレンス	第 5、6 回	ケースカンファレンス	第 7、8 回	ケースカンファレンス	第 9 回	全体ケースカンファレンス	第 10、11 回	ケースカンファレンス	第 12 回	全体ケースカンファレンス	第 13 回	第 1 回 リサーチカンファレンス	第 14、15 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 16 回	全体ケースカンファレンス	第 17、18 回	講演会（シンポジウム）	第 19、20 回	ケース研究実習	第 21、22 回	ケースカンファレンス	第 23 回	全体ケースカンファレンス	第 24 回	第 2 回 リサーチカンファレンス	第 25、26 回	ケースカンファレンス	第 27 回	全体ケースカンファレンス	第 28 回	第 2 回 相談室打ち合わせ会	第 29、30 回	ケースカンファレンス	第 31 回	全体ケースカンファレンス	第 32、33 回	ケースカンファレンス	第 34 回	第 3 回 リサーチカンファレンス	第 35、36 回	ケースカンファレンス	第 37 回	全体ケースカンファレンス	第 38、39 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 40、41 回	引継ぎカンファレンス	第 42、43 回	引継ぎカンファレンス	第 44 回	全体ケースカンファレンス
第 1 回	相談室打ち合わせ会																																																												
第 2、3 回	オリエンテーション																																																												
第 4 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 5、6 回	ケースカンファレンス																																																												
第 7、8 回	ケースカンファレンス																																																												
第 9 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 10、11 回	ケースカンファレンス																																																												
第 12 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 13 回	第 1 回 リサーチカンファレンス																																																												
第 14、15 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																												
第 16 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 17、18 回	講演会（シンポジウム）																																																												
第 19、20 回	ケース研究実習																																																												
第 21、22 回	ケースカンファレンス																																																												
第 23 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 24 回	第 2 回 リサーチカンファレンス																																																												
第 25、26 回	ケースカンファレンス																																																												
第 27 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 28 回	第 2 回 相談室打ち合わせ会																																																												
第 29、30 回	ケースカンファレンス																																																												
第 31 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 32、33 回	ケースカンファレンス																																																												
第 34 回	第 3 回 リサーチカンファレンス																																																												
第 35、36 回	ケースカンファレンス																																																												
第 37 回	全体ケースカンファレンス																																																												
第 38、39 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																												
第 40、41 回	引継ぎカンファレンス																																																												
第 42、43 回	引継ぎカンファレンス																																																												
第 44 回	全体ケースカンファレンス																																																												

	□相談室の実習では、実習科目担当教員、スーパーヴァイザー、並行ケース担当相談員、相談室スタッフであるその他の心理臨床専攻の教員・研究員から指導を受け、支援や連携について実践的に学ぶ。 【ケースカンファレンス】 □アセスメントについての検討、クライアントの心の動きの理解、セラピストの介入の仕方、面接過程全体についての検討など焦点を絞り、主に 2 年生によるケース発表に対して検討を行う。臨床心理実習Ⅰ-②と合同で行う。 □全体ケースカンファレンスは、毎月 1 回（年間 9 回）、学内相談室に所属する教員・研究員全体で行う。 □1 月には引継ぎケース・カンファレンスでのケース検討に参加する。 【ケース研究実習】 □事例研究の学習と発表を行う 【心理臨床研究センター（心理臨床相談室）の活動】 □心理相談室打ち合わせ会、リサーチカンファレンス、ケースカンファレンス、講演会・シンポジウムなどの開催準備や参加、相談室の運営、紀要編集などを行う。
事前学習の内容 学習上の注意	参考文献など、授業に関連する文献を読みながら学習を進めていくこと。
本科目の関連科目	臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ-②（心理実践実習）、臨床心理実習Ⅰ-③（心理実践実習）
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	大塚義孝他監修，下山晴彦編『臨床心理学全書 4 臨床心理実習論』誠信書房，2003 鑪幹八郎・名島潤慈編『心理臨床家の手引 [第 4 版]』誠信書房，2018 竹内健児『100 のワークで学ぶカウンセリングの見立てと方針』創元社、2021 竹内健児『Q & A で学ぶ 遊戯療法と親面接の考え方・進め方』創元社、2019 小俣和義『親子面接のすすめ方—子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版、2006 飽田典子『遊戯法（プレイセラピー）—子どもの心理臨床入門』新曜社，1999 田中千穂子『心理臨床への手引き—初心者問いに答える』東京大学出版会，2016 河合隼雄『カウンセリングの実践問題』誠信書房、1996 熊倉伸宏『面接法』新興医学出版社、2002 他、授業で随時紹介する。
成績評価 方法と基準	①ディスカッションへの参加姿勢 20%、②課題（レポート、学内実習日誌）の提出と内容評価 40%、③学内実習への取り組み（相談活動と連携、及び SV への取り組み。事例の適切な理解と対応。相談活動に関する手引きやガイドラインの遵守。心理臨床研究センターの活動全般に関する責任感、主体性、積極性のある取り組み）40%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。

科目名	臨床心理実習Ⅰ-②（心理実践実習）		4単位																																																
担当者	小松原 智子・高橋 蔵人・辻野 達也・早川 徹 瀬地山葉矢（SVのみ）・早川すみ江*・福元 理英*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *全体ケースカンファレンス、引継ぎカンファレンス、スーパーヴィジョンを担当																																																		
テーマ	学内実習を通して、心理臨床の知識と技能を習得する																																																		
科目のねらい	<キーワード> 学内実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス、アセスメント <内容の要約> 学内実習（本学の心理臨床研究センター（心理臨床相談室）での実習、学内教員によるスーパーヴィジョン、ケース・カンファレンスへの参加およびケース報告や検討等）を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していく力を養う。 <学習目標> 心理臨床における基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、実際に心理的支援を要する者等の理解および支援を実践していくことができる。																																																		
授業の進め方	<table><tr><td>第 1、 2 回</td><td>オリエンテーション</td></tr><tr><td>第 3 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 4、 5 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 6、 7 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 8 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 9、 10 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 11 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 12 回</td><td>ケース研究実習（オリエンテーション）</td></tr><tr><td>第 13、 14 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 15 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 16、 17 回</td><td>ケース研究実習</td></tr><tr><td>第 18、 19 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 20 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 21、 22 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 23 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 24、 25 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 26 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 27、 28 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 29、 30 回</td><td>ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 31 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr><tr><td>第 32、 33 回</td><td>ケースカンファレンス、振り返り</td></tr><tr><td>第 34、 35 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 36、 37 回</td><td>引継ぎカンファレンス</td></tr><tr><td>第 38 回</td><td>全体ケースカンファレンス</td></tr></table> 【学内実習】 □原則として、学内心理相談室における2年次のケース担当実習は150時間程度担当すること。 〔内訳：インテーク等の陪席、心理検査、心理面接等を3～4ケース（60時間程度）以上担当する。また、1セッションにつき、事前・事後学習（準備、記録、検討等）を1時間程度行い、1～2セッションにつき、スーパーヴィジョン1時間程度受けること。〕 □相談室の実習では、受付実習や陪席とともに、心理面接および心理検査を担当し、担当スーパーヴァイザーらによるスーパーヴィジョンを受ける。また、実習内容について学内実習日誌にまとめる。 □相談室の実習では、実習科目担当教員、スーパーヴァイザー、並行ケース担当相談員、相談室スタッフであるその他の心理臨床専攻の教員・研究員から指導を受け、支援や連携について実践的に学ぶ。 【ケースカンファレンス】 □アセスメントについての検討、クライアントの心の動きの理解、セラピストの介入の仕方、面接過程全体についての検討など、焦点を絞ったケース検討を行う。臨床心理実習Ⅰ-①と合同で行う。 □全体ケースカンファレンスは、毎月1回（年間9回）、学内相談室に所属する教員・研究員全体で行う。			第 1、 2 回	オリエンテーション	第 3 回	全体ケースカンファレンス	第 4、 5 回	ケースカンファレンス	第 6、 7 回	ケースカンファレンス	第 8 回	全体ケースカンファレンス	第 9、 10 回	ケースカンファレンス	第 11 回	全体ケースカンファレンス	第 12 回	ケース研究実習（オリエンテーション）	第 13、 14 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 15 回	全体ケースカンファレンス	第 16、 17 回	ケース研究実習	第 18、 19 回	ケースカンファレンス	第 20 回	全体ケースカンファレンス	第 21、 22 回	ケースカンファレンス	第 23 回	全体ケースカンファレンス	第 24、 25 回	ケースカンファレンス	第 26 回	全体ケースカンファレンス	第 27、 28 回	ケースカンファレンス	第 29、 30 回	ケースカンファレンス	第 31 回	全体ケースカンファレンス	第 32、 33 回	ケースカンファレンス、振り返り	第 34、 35 回	引継ぎカンファレンス	第 36、 37 回	引継ぎカンファレンス	第 38 回	全体ケースカンファレンス
第 1、 2 回	オリエンテーション																																																		
第 3 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 4、 5 回	ケースカンファレンス																																																		
第 6、 7 回	ケースカンファレンス																																																		
第 8 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 9、 10 回	ケースカンファレンス																																																		
第 11 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 12 回	ケース研究実習（オリエンテーション）																																																		
第 13、 14 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																		
第 15 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 16、 17 回	ケース研究実習																																																		
第 18、 19 回	ケースカンファレンス																																																		
第 20 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 21、 22 回	ケースカンファレンス																																																		
第 23 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 24、 25 回	ケースカンファレンス																																																		
第 26 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 27、 28 回	ケースカンファレンス																																																		
第 29、 30 回	ケースカンファレンス																																																		
第 31 回	全体ケースカンファレンス																																																		
第 32、 33 回	ケースカンファレンス、振り返り																																																		
第 34、 35 回	引継ぎカンファレンス																																																		
第 36、 37 回	引継ぎカンファレンス																																																		
第 38 回	全体ケースカンファレンス																																																		

	□1 月には引継ぎケース・カンファレンスでのケース検討に参加する。 【参考】 公認心理師の資格取得を目指す場合には、大学院修了までに、学内実習及び学外実習の総実習時間が計 450 時間以上となること。そのうち担当ケース（心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等）に関する実習時間は計 270 時間（うち、学外施設における当該実習時間は 90 時間以上行うこと）となること。
事前学習の内容 学習上の注意	参考文献など、授業に関連する文献を読みながら学習を進めていくこと。
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－①
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	竹内健児『100のワークで学ぶカウンセリングの見立てと方針』創元社、2021 竹内健児『Q & Aで学ぶ 心理療法の考え方・進め方』創元社、2015 小俣和義『親子面接のすすめ方ー子どもと親をつなぐ心理臨床』金剛出版、2006 山本力・鶴田和美編『心理臨床家のための「事例研究」の進め方』北大路書房、2001 津川律子・遠藤裕乃著『初心者のための臨床心理学研究実践マニュアル』金剛出版、2011 松木邦裕『改訂増補 私説対象関係論的心理療法入門ー精神分析的アプローチのすすめ』金剛出版、2016 成田善弘『セラピストのための面接技法』金剛出版、2003 栗原和彦『心理臨床家の個人開業』星和書店、2011
成績評価 方法と基準	①ディスカッションへの参加姿勢 20%、②課題（カンファレンス発表レジュメ、発表内容、レポート、学内実習日誌）の提出と内容評価 40%、③学内実習への取り組み（相談活動と連携、及びSVへの取り組み。事例の適切な理解と対応。相談活動に関する手引きやガイドラインの遵守。心理臨床研究センターの活動全般に関する責任感、主体性、積極性のある取り組み）40%で評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。

科目名	臨床心理実習Ⅰ－③（心理実践実習）	2 単位
担当者	辻野 達也・河合 裕子・高橋 蔵人 瀬地山葉矢*・福元 理英*・早川すみ江*・堀美和子*・牧野多恵子* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務 <内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。	
授業の進め方	【授業】 第 1・2 回 : 第 1 回学外実習オリエンテーション 第 3・4 回 : 第 2 回学外実習オリエンテーション 第 5・6 回 : 事前学習（福祉・教育・見学実習に向けて） 第 7 回 : 事前学習（医療） 第 8・9 回 : 見学実習 第 10 回 : 見学実習後指導・課題検討 第 11・12 回 : 実習先指導（1ヶ所目継続実習） 第 13 回 : 中間振り返り・課題検討 第 14・15 回 : 実習報告・振り返り 【学外実習】 <実習期間・内容> ・学外実習施設における実習は、1 年次後期より開始する。 ・1 年次においては、見学を主とする実習（1 日）1 箇所に参加し、その後、原則 1 箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10 日間（毎週の継続、または連続した日程・1 日 6 時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の指導担当者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎	

	回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。 ＜参考＞ 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2 年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は 90 時間以上とする（なお、学内実習と合わせた担当ケースの実習時間数は 270 時間以上とする）。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の 5 分野うち、医療機関は必須とし、3 分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。
事前学習の内容 学習上の注意	・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の 関連科目	臨床心理基礎実習、臨床心理実習Ⅰ－①
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	・津川律子・橘玲子編『心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鏑幹一郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第 4 版]』誠信書房、2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』海馬書房、2005 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』星和書店、2007 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』、2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社、2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社、2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	以下の A の項目が達成されていることを条件とし、B の各項目について評価して総合評価 60 点以上を合格とする。 A：①事前・事後の授業での発表、1 箇所の見学実習 ②1 箇所 10 日程度での施設での実習 B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解

科目名	臨床心理実習Ⅰ－④（心理実践実習）	2単位
担当者	辻野 達也・小松原 智子・高橋 蔵人 瀬地山葉矢*・福元 理英*・早川すみ江*・堀美和子*・千賀則史*・吉野真紀* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務 <内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。	
授業の進め方	【授業】 第01～05回：事前学習（医療・福祉・教育） 第06～09回：学外実習 第10～15回：実習報告会・まとめ 【学外実習】 <実習期間・内容> ・1年次後期学外実習を終えた者に対して、2年次前期より、学外実習施設における実習を開始する。 ・原則1箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10日間（毎週の継続、または連続した日程・1日6時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の実習指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。 <参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は90時間以上とする（なお、学内実習と	

	合わせた担当ケースの実習時間数は 270 時間以上とする)。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の 5 分野うち、医療機関は必須とし、3 分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。 ・訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。
事前学習の内容 学習上の注意	・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－②、臨床心理実習Ⅰ－③、⑤
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	・津川律子・橘玲子編『心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鑓幹八郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第 4 版]』誠信書房、2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』海馬書房、2017 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』診療新社、2007 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』、2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社、2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社、2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	以下の A の項目が達成されていることを条件とし、B の各項目について評価して総合評価 60 点以上を合格とする。 A：①事前・事後の授業での発表、 ②1 箇所 10 日程度での施設での実習 B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解

科目名	臨床心理実習Ⅱ	1 単位
担当者	河合 裕子、辻野 達也、高橋 蔵人	
テーマ	他機関の専門家との連携方法について実践的に学び、他機関専門家の臨床や研究の知を学ぶ。 また、心理臨床相談室の組織運営に携わる中で組織内関係についても学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 他機関との連携、リサーチカンファレンス、講演会、事例研究、組織内連携 <内容の要約> 講義や演習・その他の実習で学んだことを実践する場としての、学内心理臨床相談室（心理臨床研究センター）において、相談室運営に携わる一員として役割意識をもち、相談室内の連携・活動・事例研究の方法について学ぶ。 また、リサーチカンファレンス、講演会等の企画や開催に関わるなかで、学外の専門機関の専門家との連携について実践的に学び、他職種の専門家の臨床や研究の知を学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床相談室の運営に積極的に関わる中で、組織内での円滑な行動・連携・協力を行うことができる。 ・リサーチカンファレンスや他機関との連携会議に関わる中で、企画の力や他機関の専門家との連携の仕方について学び、多職種の知見を理解することができる。	
授業の進め方	時間割上は火曜日月 1 回程度。 第 1、2 回 : 心理臨床相談室打ち合わせ会①、相談室活動 第 3 回 : リサーチカンファレンス① 第 4、5 回 : 講演会 第 6 回 : リサーチカンファレンス② 第 7、8 回 : 他機関との連携 第 9、10 回 : 心理臨床相談室打ち合わせ会②、相談室活動 第 11 回 : リサーチカンファレンス③ 他機関との連携は、リサーチカンファレンスや講演会等の企画や開催打ち合わせ等とする。その他、紀要（事例研究）に関する指導を受け、紀要に関わる活動にも携わることをとする。	
事前学習の内容 学習上の注意	院生同士の協力や積極的な参加の姿勢が求められる。	
本科目の 関連科目	臨床心理実習Ⅰー①、臨床心理実習Ⅰー②	
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。	
参考文献	リサーチカンファレンスや講演会にお招きする専門家の論文・著書	
成績評価 方法と基準	各役割における参加姿勢 70%、課題（レポート）の提出と内容評価 30%	

科目名	心理学研究法特論	2 単位																																																												
担当者	牧野 多恵子・早川 すみ江・堀 美和子・福元 理英																																																													
テーマ	修士論文作成の基礎																																																													
科目のねらい	<キーワード> 研究法、研究計画、研究倫理、量的研究、質的研究 <内容の要約> 本特論の目的は、心理学の実証的な研究についての理解を深めることを通して修士論文研究（臨床心理学に関わる研究）を推進し、研究論文を作成する基礎的な力を養うことである。 <学習目標> ① 研究の意義や研究の進め方、研究倫理を理解できる。 ② 代表的な臨床心理学の研究手法（面接法、質問紙調査法、質的研究、事例研究法、検査法など）を学び、それを説明することができる。 ③ 修士論文の研究計画書を作成することができる。 ④ 論文を批判的に読む力を身につけることができる。																																																													
授業の進め方	講義だけでなく、各自の発表（研究法各論、研究計画書、関連論文講読）を取り入れて進める。講義は以下のスケジュールで進める予定。 <table><tr><td>第 1 回</td><td>「心理学研究法特論」のオリエンテーション：</td><td>牧野</td><td>(4/6)</td></tr><tr><td>第 2 回</td><td>研究計画書の書き方・研究倫理：</td><td>牧野</td><td>(4/6)</td></tr><tr><td>第 3 回</td><td>研究法各論（質問紙調査法）：</td><td>牧野</td><td>(4/20)</td></tr><tr><td>第 4 回</td><td>研究法各論（事例研究法）：</td><td>早川</td><td>(4/20)</td></tr><tr><td>第 5 回</td><td>研究法各論（実践研究）：</td><td>堀</td><td>(5/11)</td></tr><tr><td>第 6 回</td><td>研究法各論（実験・検査法）：</td><td>福元</td><td>(5/11)</td></tr><tr><td>第 7 回</td><td>研究法各論（面接法・質的研究）：</td><td>牧野</td><td>(5/25)</td></tr><tr><td>第 8 回</td><td>研究法各論（介入研究）：</td><td>牧野</td><td>(5/25)</td></tr><tr><td>第 9 回</td><td>各自の研究計画書の発表と討論（1）：</td><td>牧野</td><td>(6/8)</td></tr><tr><td>第 10 回</td><td>各自の研究計画書の発表と討論（2）：</td><td>牧野</td><td>(6/8)</td></tr><tr><td>第 11 回</td><td>各自の研究計画書の発表と討論（3）：</td><td>牧野</td><td>(6/22)</td></tr><tr><td>第 12 回</td><td>関連論文講読（1）：</td><td>牧野</td><td>(6/22)</td></tr><tr><td>第 13 回</td><td>関連論文講読（2）：</td><td>牧野</td><td>(7/6)</td></tr><tr><td>第 14 回</td><td>関連論文講読（3）：</td><td>牧野</td><td>(7/6)</td></tr><tr><td>第 15 回</td><td>まとめと後期以後の修論の取り組み：</td><td>牧野</td><td>(7/23)</td></tr></table> ※受講生の研究で用いる可能性がある研究法を重点的に学ぶことができるよう配慮するため、内容は変更する可能性がある。		第 1 回	「心理学研究法特論」のオリエンテーション：	牧野	(4/6)	第 2 回	研究計画書の書き方・研究倫理：	牧野	(4/6)	第 3 回	研究法各論（質問紙調査法）：	牧野	(4/20)	第 4 回	研究法各論（事例研究法）：	早川	(4/20)	第 5 回	研究法各論（実践研究）：	堀	(5/11)	第 6 回	研究法各論（実験・検査法）：	福元	(5/11)	第 7 回	研究法各論（面接法・質的研究）：	牧野	(5/25)	第 8 回	研究法各論（介入研究）：	牧野	(5/25)	第 9 回	各自の研究計画書の発表と討論（1）：	牧野	(6/8)	第 10 回	各自の研究計画書の発表と討論（2）：	牧野	(6/8)	第 11 回	各自の研究計画書の発表と討論（3）：	牧野	(6/22)	第 12 回	関連論文講読（1）：	牧野	(6/22)	第 13 回	関連論文講読（2）：	牧野	(7/6)	第 14 回	関連論文講読（3）：	牧野	(7/6)	第 15 回	まとめと後期以後の修論の取り組み：	牧野	(7/23)
第 1 回	「心理学研究法特論」のオリエンテーション：	牧野	(4/6)																																																											
第 2 回	研究計画書の書き方・研究倫理：	牧野	(4/6)																																																											
第 3 回	研究法各論（質問紙調査法）：	牧野	(4/20)																																																											
第 4 回	研究法各論（事例研究法）：	早川	(4/20)																																																											
第 5 回	研究法各論（実践研究）：	堀	(5/11)																																																											
第 6 回	研究法各論（実験・検査法）：	福元	(5/11)																																																											
第 7 回	研究法各論（面接法・質的研究）：	牧野	(5/25)																																																											
第 8 回	研究法各論（介入研究）：	牧野	(5/25)																																																											
第 9 回	各自の研究計画書の発表と討論（1）：	牧野	(6/8)																																																											
第 10 回	各自の研究計画書の発表と討論（2）：	牧野	(6/8)																																																											
第 11 回	各自の研究計画書の発表と討論（3）：	牧野	(6/22)																																																											
第 12 回	関連論文講読（1）：	牧野	(6/22)																																																											
第 13 回	関連論文講読（2）：	牧野	(7/6)																																																											
第 14 回	関連論文講読（3）：	牧野	(7/6)																																																											
第 15 回	まとめと後期以後の修論の取り組み：	牧野	(7/23)																																																											
事前学習の内容・学習上の注意	学部レベルの「心理学研究法」については習得、復習しておくこと。																																																													
本科目の関連科目	心理統計法特論																																																													
テキスト	特に指定しない。																																																													
参考文献	授業中に適宜紹介する。																																																													
成績評価方法と基準	研究法各論および関連論文の発表、討論へのコミットメント（50%）、研究計画書の作成（50%）により評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。																																																													

科目名	心理統計法特論	2 単位
担当者	牧野 多恵子	
テーマ	心理学研究の理解および実施に必要な、心理統計の考え方・手法を習得する	
科目のねらい	<キーワード> 記述統計、推測統計、仮説検定、多変量解析、SPSS <内容の要約> 本特論は、心理学研究の基礎的な統計手法について、その概念理解を通して、分析法の選択・解釈が適切にできることを到達目標とする。実際に統計パッケージ（SPSS）を活用して演習を行う。概念理解と実践との反復を通じて、心理学における研究理解、論文読解、また質の高い修士論文の作成につなげることを目指す。 <学習目標> ① 心理学研究に用いられる統計の基礎を理解することができる。 ② 各種統計手法を用いて、心理データの分析を実施することができる。 ③ 修士論文の研究計画を念頭に、適切な分析法を選択し実施することができる。	
授業の進め方	第 1 回 イン트로ダクション：心理統計の基礎知識 第 2 回 心理データの基礎知識と SPSS の基本操作 第 3 回 記述統計と推測統計の理解 第 4 回 相関関係の分析 第 5 回 カイ二乗検定 第 6 回 t 検定 第 7 回 分散分析 第 8 回 回帰分析 第 9 回 因子分析 第 10 回 尺度構成の基礎 第 11 回 共分散構造分析 第 12 回 さまざまな多変量解析 第 13 回 ノンパラメトリック検定 第 14 回 仮説検定・効果量・信頼区間の理解 第 15 回 まとめ：研究計画と分析法の選択 ※受講生の研究で用いる可能性がある統計手法を重点的に学ぶことができるよう配慮するため、内容は変更する可能性がある。	
事前学習の内容 学習上の注意	・学部レベルの「心理学統計法」については習得、復習しておくこと。 ・授業時間外にデータ収集など課題を課すことがある。授業では統計解析パッケージ（SPSS）を使用する。受講生には PC 操作の基礎的技能が求められる。	
本科目の関連科目	心理学研究法特論	
テキスト	特に指定しない。	
参考文献	授業中に適宜紹介する。	
成績評価 方法と基準	演習への積極的参加度（30%）、課題レポート（30%）、最終レポート（40%）により評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。	

科目名	人格心理学特論 (教育分野に関する理論と支援の展開)	2 単位
担当者	小塩真司	
テーマ	科目内容に関わるテーマを設定し、ご記入ください。	
科目のねらい	<キーワード> 科目内容に関係するキーワードを、2～5 つ程度記入してください。 1. パーソナリティ, 2. 教育, 3. 心理測定, 4. 発達, 5. 適応 <内容の要約> 科目内容の要約をわかりやすくご記入ください。 パーソナリティ心理学を中心に、教育や発達など周辺領域を含む心理学的な個人差を扱う研究知見について理解を深める。パーソナリティ心理学は、長い歴史をもち教育場面・臨床場面をはじめとする他分野にも広く応用されてきた。近年では、多くのデータと統計処理手法によって、人間の直観的理解を超えた研究知見が数多く生み出されてきている。講義と論文の紹介を通じて、パーソナリティ心理学の歴史的変遷と研究知見、研究方法、個人差の測定方法を学び、人間の個人差を理解することができる。 <学習目標> 科目開講専攻のディプロマ・ポリシーとの整合を意識しながら記入してください。 臨床心理にかかわるパーソナリティ心理学について専門的な知識を備えることができる。 パーソナリティ概念を用いて、適切な問題意識のもとに研究を計画することができる。	
授業の進め方	第1回 導入：パーソナリティ心理学とは 第2回 人間の個人差を考える 第3回 パーソナリティ概念を理解する 第4回 パーソナリティに関する論文を読む (1) 第5回 類型論と特性論 第6回 語彙仮説から一般因子の探究へ 第7回 Big Five パーソナリティの発見 第8回 パーソナリティに関する論文を読む (2) 第9回 パーソナリティ尺度・パーソナリティ検査 第10回 発達について考える 第11回 現実社会のなかのパーソナリティ 第12回 パーソナリティに関する論文を読む (3) 第13回 「よいパーソナリティ」という考え方 第14回 現実への応用：心理アセスメントと心理学的支援 第15回 パーソナリティに関する論文を読む (4)	
事前学習の内容・学習上の注意	心理学の基礎的な知識および、調査的手法を用いた心理学の基礎的な知識を前提として講義を行う。参考図書のいずれかに目を通し、理解を深めることが望ましい。	
本科目の関連科目	大学院開講科目のなかで履修していることが望ましい科目や応用科目があれば記入してください。 臨床心理査定演習 I, 心理統計法特論, 社会心理学特論。これらに限らず、心理学に関連する多くの科目とのあいだで関連を想定することが望ましい。	
テキスト	なし	
参考文献	小塩真司・松本麻友子・松岡弥玲・中島奈保子 (2025). 読んでわかるパーソナリティ心理学 (ライブラリ 読んでわかる心理学 11) サイエンス社	

	小塩真司（編）（2025）. 非認知能力の発達：生涯にわたる変化と影響 北大路書房 小塩真司（編著）（2024）. 心理尺度構成の方法：基礎から実践まで 誠信書房 小塩真司（2024）. 「性格が悪い」とはどういうことか—ダークサイドの心理学 筑摩書房 谷 伊織・阿部晋吾・小塩真司（編著）（2023）. Big Five パーソナリティ・ハンドブック：5つの因子から「性格」を読み解く 福村出版 小塩真司（2021）. 非認知能力：概念・測定と教育の可能性 北大路書房 小塩真司（2020）. 性格とは何か 中央公論新社
成績評価方法 と基準	授業への参加の様子及びコメントシート（50%）と最終レポート（50%）を総合的に評価する。 総合評価60点以上を合格とする。

科目名	教育臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）	2 単位																																													
担当者	辻野 達也																																														
テーマ	子どもと保護者、学校を援助する方法について学ぶ																																														
科目のねらい	<キーワード> 学校臨床、スクールカウンセラー、心理教育、コンサルテーション、学習支援 <内容の要約> スクールカウンセラーとして心理職が学校に入り、子どもの発達・学習支援や臨床心理学的な支援を行う意義とその方法について学ぶ。子ども・保護者との相談、教員との連携、学校・地域への支援方法について、事例検討・ディスカッションを通して学んでいく。 <学習目標> 学校臨床の枠組みについて学び、スクールカウンセラーとしての職務、具体的な支援方法（個別支援、他職種との連携）について理解することができる。																																														
授業の進め方	授業では、学校臨床の基礎的な知識と実践について広く学ぶため、講義・ディスカッション・事例検討などを行う。 <table border="1"> <tbody> <tr><td>第 1</td><td>回</td><td>オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について</td></tr> <tr><td>第 2</td><td>回</td><td>スクールカウンセリングの枠組み・校内・校外連携、多職種連携</td></tr> <tr><td>第 3</td><td>回</td><td>不登校の理解と対応（傾向と対策）</td></tr> <tr><td>第 4</td><td>回</td><td>不登校の理解と対応（個人・家族への支援）</td></tr> <tr><td>第 5</td><td>回</td><td>いじめの理解と対応（被害者支援）</td></tr> <tr><td>第 6</td><td>回</td><td>いじめの理解と対応（加害者支援）</td></tr> <tr><td>第 7</td><td>回</td><td>発達障害の理解と対応（ASD）</td></tr> <tr><td>第 8</td><td>回</td><td>発達障害の理解と対応（ADHD）</td></tr> <tr><td>第 9</td><td>回</td><td>非行の理解と対応</td></tr> <tr><td>第 10</td><td>回</td><td>虐待の理解と対応</td></tr> <tr><td>第 11</td><td>回</td><td>子どもたちの発達課題</td></tr> <tr><td>第 12</td><td>回</td><td>思春期心性</td></tr> <tr><td>第 13</td><td>回</td><td>学校における危機対応</td></tr> <tr><td>第 14</td><td>回</td><td>被災地における地域支援</td></tr> <tr><td>第 15</td><td>回</td><td>山村留学</td></tr> </tbody> </table>		第 1	回	オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について	第 2	回	スクールカウンセリングの枠組み・校内・校外連携、多職種連携	第 3	回	不登校の理解と対応（傾向と対策）	第 4	回	不登校の理解と対応（個人・家族への支援）	第 5	回	いじめの理解と対応（被害者支援）	第 6	回	いじめの理解と対応（加害者支援）	第 7	回	発達障害の理解と対応（ASD）	第 8	回	発達障害の理解と対応（ADHD）	第 9	回	非行の理解と対応	第 10	回	虐待の理解と対応	第 11	回	子どもたちの発達課題	第 12	回	思春期心性	第 13	回	学校における危機対応	第 14	回	被災地における地域支援	第 15	回	山村留学
第 1	回	オリエンテーション・スクールカウンセラー制度について																																													
第 2	回	スクールカウンセリングの枠組み・校内・校外連携、多職種連携																																													
第 3	回	不登校の理解と対応（傾向と対策）																																													
第 4	回	不登校の理解と対応（個人・家族への支援）																																													
第 5	回	いじめの理解と対応（被害者支援）																																													
第 6	回	いじめの理解と対応（加害者支援）																																													
第 7	回	発達障害の理解と対応（ASD）																																													
第 8	回	発達障害の理解と対応（ADHD）																																													
第 9	回	非行の理解と対応																																													
第 10	回	虐待の理解と対応																																													
第 11	回	子どもたちの発達課題																																													
第 12	回	思春期心性																																													
第 13	回	学校における危機対応																																													
第 14	回	被災地における地域支援																																													
第 15	回	山村留学																																													
事前学習の内容 学習上の注意	配布資料や参考文献等を読んでおくこと																																														
本科目の 関連科目	人格心理学特論																																														
テキスト	授業内で資料を配布する																																														
参考文献	青木真理 スクールカウンセラーのための仕事術 明治図書出版 2024 かしまえりこ、神田橋條治 スクールカウンセリングモデル 100 例 創元社 2006 村瀬嘉代子監修 学校が求めるスクールカウンセラー 遠見書房 2013 福岡県臨床心理士会編 学校コミュニティへの緊急支援の手引き（第 3 版） 金剛出版 2020																																														
成績評価 方法と基準	授業態度(30%)、討論への参加(40%)、レポート等の平常点(30%)を総合して評価する。全体で 60%以上を合格とする。																																														

科目名	犯罪心理および被害者支援特論 (司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)	2 単位
担当者	堀尾良弘	
テーマ	犯罪非行臨床における基礎から応用的な知識・技術等の習得及び犯罪非行に関して心理臨床的かつ社会的視点からその背景・要因についての理解	
科目のねらい	<キーワード> 1. 司法・犯罪の心理臨床(犯罪心理学・非行臨床心理学) 2. 司法における関係機関 3. 司法・犯罪分野における心理専門職の役割 4. 犯罪者・非行少年の心理と被害者性 5. 司法における鑑定 <内容の要約> 本講義では①司法における関係機関、心理専門職の役割について理解し、②具体的事例を通して心理臨床的・社会的な視点から犯罪非行の背景・要因、犯罪心理を理解する。さらに、犯罪加害者が抱える被害者性に視点を当て、被害から加害への転化と被害者性について心理臨床的理解・考察を深める。 <学習目標> ・司法・犯罪分野における臨床心理について専門知識を習得できる。 ・心理臨床的・社会的な視点から犯罪非行の背景・要因を考察し犯罪心理を理解できる。 ・授業で取り上げる論文について自らの考察を整理し、適切に説明することができる。 ・犯罪加害者が抱える被害者性の心理的問題を見立て、被害者性の改善や更生のための心理的支援について考察できる。	
授業の進め方	第1回 犯罪心理学・非行臨床心理学への招待ー授業ガイダンス 第2回 犯罪心理学・非行臨床心理学の概論ー司法の関係機関、心理専門職の役割 第3回 犯罪心理学・非行臨床心理学の基礎ー司法・犯罪分野の歴史的心理学研究 第4回 犯罪心理学・非行臨床心理学の応用ー司法・犯罪分野の数量的心理学研究 第5回 事例を通して犯罪・非行の理解を深める(1)非行少年の心理アセスメント 第6回 事例を通して犯罪・非行の理解を深める(2)非行少年の心理的支援 第7回 事例を通して犯罪・非行の理解を深める(3)対象関係論からの視点 第8回 司法・犯罪の臨床心理学研究、事例、被害者支援の振り返りと中間まとめ 第9回 日本の犯罪事件史から学ぶ(動画資料視聴) 第10回 精神鑑定事例から学ぶ(1)犯罪少年の本人歴(出生から就学まで) 第11回 精神鑑定事例から学ぶ(2)犯罪少年の本人歴(学校時代) 第12回 精神鑑定事例から学ぶ(3)犯行に至る心理、犯行時の心理 第13回 精神鑑定事例から学ぶ(4)犯行時の状況と精神状態 第14回 精神鑑定事例から学ぶ(5)精神医学的診断 第15回 司法・犯罪における加害者の被害者性と被害者支援、全体の振り返りとまとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	・ 次回の授業範囲を予習し、専門用語の意味等を理解しておくこと。 ・ 毎回の授業終了時に、次回の資料や論文を配布するので読んでおくこと。 ・ 新聞を読み、少年非行や成人犯罪の動向から、現代社会を広く知ろう心掛けること。	
本科目の関連科目	精神医学特論、心の健康教育特論	
テキスト	テキストの代わりに、授業で読む論文等を配布する。	
参考文献	授業内で紹介する。	
成績評価方法と基準	レポート(60点)、ディスカッションへの参加度(40点)により評価し、総合評価60点以上を合格とする。	

科目名	産業・組織心理学特論 (産業・労働分野に関する理論と支援の展開)	2 単位
担当者	三宅美樹	
テーマ	産業・組織心理学の理論と産業・労働に関する支援	
科目のねらい	<キーワード> 1. 産業・組織心理学 2. 産業・労働分野の心理的支援 3. 組織と労働者 <内容の要約> 産業・労働分野で活動する心理職に必要とされる理論・関連法規・心理的支援・支援の実際 <学習目標> 職場で起こった事案に対して、アセスメントを行い、心理的支援について実践的に考えることができる。 必要な心理的支援に関して、個人と組織の関係者に説明することができる。	
授業の進め方	第1回 イン트로ダクション（産業・労働分野の全体像の把握と理解） 第2回 産業・組織心理学①（産業・組織心理学とは） 第3回 産業・組織心理学②（キャリア発達） 第4回 産業・組織心理学③（ワークモチベーションと組織コミットメント） 第5回 産業・組織心理学④（リーダーシップとフォロアーズシップ） 第6回 産業・組織心理学⑤（職場の人間関係、ハラスメント） 第7回 産業・組織心理学⑥（職業性ストレスとメンタルヘルス） 第8回 産業・組織心理学⑦（作業と安全衛生、労働災害、危機介入） 第9回 産業・組織心理学⑧（ストレスチェック制度） 第10回 産業保健・産業精神保健と労働関連法規 第11回 職場復帰支援 第12回 障がいのある労働者への支援 第13回 ダイバーシティと働き方改革 第14回 架空事例から組織を考える 第15回 まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	・指定したテキストを事前に読んでおくこと。疑問点をまとめておくこと。 ・次回の授業範囲を予習し、専門用語の意味等を理解しておくこと。 ・授業の前半では単元毎の受講生による発表、ディスカッション、後半は担当者の講義と質疑応答により学びを進める。 ・単元に応じて事例検討やワークにより実践的に学ぶ。	
本科目の関連科目	臨床心理学特論、臨床心理実習、C・D 群の科目	
テキスト	「産業・組織心理学 - 個人と組織の心理学的支援のために」 加藤容子・三宅美樹（編著） ミネルヴァ書房	
参考文献	平木典子・松木桂樹(編)「産業・労働分野」(創元社) 金井篤子(編)「産業心理臨床実践」(ナカニシヤ出版) 山口裕幸・金井篤子「よくわかる産業・組織心理学」(ミネルヴァ書房) 新田泰生・足立智明(編)「心理職の組織への関わり方 - 産業心理臨床モデルの構築に向けて」(誠信書房)	
成績評価方法と基準	ディスカッションへの参加度(40%)、課題レポート(30%)・発表(30%) による総合評価を行い、総合評価 60 点以上を合格とする。 ※単なる出席回数でなく、講義への参画状況	

科目名	精神医学特論（保健医療分野に関する理論と支援の展開）	2 単位
担当者	石島 洋輔	
テーマ	精神疾患や発達障害の知識を習得し、心理的支援の実践につなげる	
科目のねらい	<キーワード> 精神医学、診断基準、精神療法、発達障害、心的外傷後ストレス障害（PTSD） <内容の要約> 主な精神疾患について、症状・経過・診断・治療の基本的なことがらを解説し、臨床現場での適切な心理・社会的な対応の工夫について学ぶ。今日の社会におけるメンタルヘルスの課題や展望について議論し、文献や事例を通して考察を深める。 <学習目標> ＊各精神疾患の心理学的特徴を把握し、その知識を心理療法的アプローチに応用することができる ＊保健医療分野において他職種と専門的連携をおこなうことができる	
授業の進め方	第1回 精神疾患総論、精神科の診断（1） 第2回 精神疾患総論、精神科の診断（2） 第3回 精神疾患の心理社会的治療 第4回 うつ病と双極性障害 第5回 依存症（ゲスト講義：古川優樹先生） 第6回 統合失調症 第7回 心的外傷後ストレス障害（PTSD）とトラウマ治療（1） 第8回 心的外傷後ストレス障害（PTSD）とトラウマ治療（2） 第9回 不安症、強迫症 第10回 摂食障害 第11回 精神療法と動機付け面接 第12回 神経発達症（発達障害）、認知症 第13回 精神科リハビリテーション 第14回 論文の抄読・発表および討論（1） 第15回 論文の抄読・発表および討論（2）	
事前学習の内容・学習上の注意	日頃から授業で取り上げる内容と関連する最近の話題に関心を持ち、書籍等で自発的に探究し基礎知識を養っておくことを求める。 講義内容の予習および授業中の配布資料の復習をする。第14・15回については討議用の論文を各受講者に選定してもらい、あらかじめ配布するので読んでおくこと。	
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ、教育臨床心理学特論、発達臨床心理学特論、など	
テキスト	とくに指定しない	
参考文献	「こころの医学入門」近藤直司・田中康雄・本田秀夫編集 中央法規出版 「赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア」白川美也子著 アスク・ヒューマン・ケア 「精神療法面接のコツ」神田橋條治著 岩崎学術出版社	
成績評価方法と基準	コメントカード（60点）、ディスカッションへの参加度（20点）、プレゼンテーション・発表資料（20点）により評価し、総合評価をおこない、60点以上を合格とする	

科目名	発達臨床心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）	2 単位
担当者	瀬地山 葉矢 堀 美和子 牧野 多恵子	
テーマ	生涯にわたる発達とその課題の理解と支援	
科目のねらい	<キーワード> 生涯発達、関係性の発達、老年期の適応、障害の理解、心理支援 <内容の要約>発達臨床心理学特論では人の生涯発達における今日的な課題について学び、検討する。 ① 子の妊娠、誕生から児童期までの養育者と子どもそれぞれの発達臨床的課題について学び、心理臨床的な支援について検討する。 ② 成人後期から老年期の発達臨床的課題について学び、心理臨床的な支援について検討する。 ③ 「しょうがい（障害）」についての学びを深め、障害児・者の発達課題や支援、家族を含めた心理臨床的支援について検討する。 <学習目標> 人の生涯にわたる発達に関する今日的な課題を理解するとともに、発達の理論および発達に影響を及ぼす要因について理解することができる。特に、①乳幼児期の関係性の発達とその支援について理解し、②障害児と家族の心理状況について理解し、その見立てと支援計画を立てること、③障害を抱える人や高齢期の問題を理解し、心理支援を計画することができる。	
授業の進め方	3 日間の集中講義として実施する。下記内容については順序が前後する場合もある。適宜、コメントペーパーへの記入やディスカッションへの参加が求められる。 第 1 回 親になるということ・養育者への支援 第 2 回 胎児期から乳幼児期の発達および心理臨床的課題とアタッチメント 第 3 回 関係性の発達について 第 4 回 児童期の発達および心理臨床的課題と支援 第 5 回 養育者－子ども関係の支援 第 6 回 生涯発達からみる成人後期～老年期 第 7 回 老年期における心身の変化と適応 第 8～9 回 高齢者に生じやすい心理的問題と精神疾患 第 10 回 高齢者に対する心理アセスメントと心理支援 第 11 回 障害（しょうがい）のあるひとへの理解と支援 第 12・13 回 障害児・者の発達臨床的課題の理解と支援（知的・発達障害を中心に） 第 14 回 障害児・者の家族支援について考える 第 15 回 障害児・者への支援の実際と振り返り	
事前学習の内容・学習上の注意	・ 基本的な「発達心理学」についての知識を復習しておくこと。 ・ 事前に資料等を配布・提示した場合はそれらを読んでおくこと。	
本科目の関連科目	臨床心理学特論、精神医学特論	
テキスト		
参考文献	滝川一廣 子どものための精神医学 医学書院 2017	
成績評価方法と基準	コメントペーパーの提示（20％）、ディスカッションへの参加度（20％）、授業内レポート等（60％）で評価をおこない、全体で 60％以上を合格とする。	

科目名	投映法特論	2 単位
担当者	早川すみ江	
テーマ	投映法検査の中のロールシャッハ・テストとバウムテストについて、事例をもとに討論を通して、分析・解釈の理解を深める。	
科目のねらい	<キーワード> 1.投映法検査, 2.テストバッテリー, 3.臨床心理査定, 4.精神力動的理解, 5.パーソナリティ <内容の要約> 投映法検査は、質問紙法や作業検査法に並び、パーソナリティを査定する上で優れた技法である。他の検査法に比べ個別的で、より詳しくパーソナリティを査定することが可能な分、その技法を習得するのは容易ではない。 本講座では、投映法検査の中でも、特にロールシャッハ・テストの分析・解釈ができるようになることを目的とする。ロールシャッハ・テストから、被験者のパーソナリティを査定し、その結果を援助に役立てる方法を身に付けていくことを目指す。またテストバッテリーについて理解し、ロールシャッハ・テストとバウムテストから、被験者のパーソナリティを立体的に描くことができるようにする。 <学習目標> ・投映法検査であるロールシャッハ・テストの分析に必要な専門的知識および技法を習得し、適切な解釈をすることができる。 ・ロールシャッハ・テストとバウムテストを通して、クライアントの抱える心理的問題を含めたパーソナリティを見立て、心理ならびに近接領域の専門家に説明することができる。 ・投映法検査を実施する上での倫理的諸問題を理解することができる。	
授業の進め方	1 年次の「臨床心理査定演習Ⅱ」の課題として実施した投映法検査（ロールシャッハ・テスト及びバウムテスト）データを、各自が分析・解釈をして発表し、討論することを通して、実際の分析・解釈の方法を身に付けていく。 第 1 回：オリエンテーション（発表の仕方） 第 2～3 回：ロールシャッハ・テストの継起分析と解釈の実際例 第 4～14 回：事例発表と討論 第 15 回：まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	・「臨床心理査定演習Ⅱ」の課題として実施したロールシャッハ・テストは、授業のはじめまでに、スコアリング・結果の整理・形式分析までしておくこと。 ・「臨床心理査定演習Ⅱ」で取りあげた文献『精神力動論』で学んだことをもとに、継起分析と総合解釈を行い、発表の準備をすること。	
本科目の関連科目	臨床心理査定演習Ⅰ・Ⅱ	
テキスト	・『精神力動論』小此木啓吾・馬場禮子著 金子書房（事務室より各自に貸し出しますので、購入の必要はありません） ・『改訂 新・心理診断法』片口安史著 金子書房（希望者には、事務室より貸し出します）	
参考文献	・馬場禮子著「ロールシャッハ法と精神分析」岩崎学術出版社 ・馬場禮子著「境界例 ロールシャッハ・テストと心理療法」岩崎学術出版社 ・ジェームズ・H・クレイガー著「思考活動の障害とロールシャッハ法」創元社 ・加藤志ほ子著「ロールシャッハ・テストの所見の書き方」岩崎学術出版 ・カール・コッホ「バウムテスト〔第 3 版〕心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究」誠信書房	
成績評価方法と基準	発表レポート（70%）・討論への参加度（30%）により評価し、全体で 60%以上を合格とする。	

科目名	心理療法特論	2 単位
担当者	高橋 蔵人、辻野 達也、河合 裕子	
テーマ	来談者中心療法、遊戯療法、認知・行動療法、芸術（表現）療法	
科目のねらい	<キーワード> 来談者中心療法、イメージを媒介とする心理療法、治療構造、芸術療法 <内容の要約> ①来談者中心療法について講義と事例検討を通して学ぶ。 ②芸術療法やイメージを媒介とする技法がもたらす治癒促進的な働きと禁忌について、講義と実習により経験的に学ぶ。それぞれの手法がもつ性質を理解することで、臨床状況（場所、対象、経過など）に応じた適用上の工夫や配慮ができるよう、実習、具体的場面の想定、事例の提示を通じて詳細に解説する。 ③認知行動療法の基本的な枠組みと支援の視点を、実践や事例を通して学ぶ。また、セルフケアや健康的な自己表現など、健康的・予防的な観点への活用について学ぶ。 <学習目標> ①来談者中心療法と遊戯療法の講義および事例検討を通して、セラピーにおいてどういったことが大切か理解を深めることができる。 ②芸術療法、イメージを媒介とする心理療法がもつ性質と治癒機序を経験的に理解し、心理療法全般に应用することができる。意識と無意識及びクライアントとセラピストの相互交流過程に関わりながら、同時にそれを客観的内省的に捉えることができる。 ③認知行動療法の概念を理解し、対人支援やセルフケアに応用することができる。	
授業の進め方	第1回 : オリエンテーション・来談者中心療法の概要 第2・3回 : 来談者中心療法についての枠組み 第4・5回 : 事例検討 第6・7回 : 芸術療法（コラージュ療法） 第8・9回 : イメージを媒介とする心理療法（夢分析） 第10回 : イメージを媒介とする心理療法（ウォッチワード・テクニック） 第11・12回 : 認知行動療法の理論の変遷と基本知識の概説、 健康的な認知的理解と自己表現（認知変容、アサーティブな表現） 第13・14回 : セルフマネジメント 第15回 : 事例検討	
事前学習の内容 学習上の注意	・理解を深めるため、事前学習や作業課題を提示することがある。 ・実習的授業内容については、授業への出席が心理的負担とならないような配慮を行う。	
本科目の 関連科目	臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ、臨床心理基礎実習、臨床心理学特論、臨床心理実習Ⅰ - ①②	
テキスト	授業での紹介文献、および配布資料。	
参考文献	領域が多岐に及ぶため、適宜授業で紹介する。 カール・ロジャーズ著 伊東博・村山正治（監訳）『ロジャーズ選集』誠信書房、2001 大野裕『折れない心を作る 40 のルール』PHP 出版、2012	
成績評価 方法と基準	ディスカッションへの参加（40%）、課題への取り組み（30%）、提出レポート（30%）により評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。	

□公認心理師資格必修科目

科目名	臨床心理実習Ⅰ－⑤（心理実践実習）	2 単位
担当者	河合 裕子・辻野 達也・高橋 蔵人 瀬地山葉矢*・福元 理英*・早川すみ江*・堀美和子*・牧野多恵子* *巡回指導担当	
テーマ	学外施設での実習を通じて、心理臨床活動の実際的な知識と技術を学ぶ。	
科目のねらい	<キーワード> 学外実習、心理職業務の実際、心理的支援、他職種連携と地域支援、職業倫理と法的義務 <内容の要約> 学外実習（学外施設での実習）と事前・事後の学習を通して、臨床心理士および公認心理師の業務において必要となる基本的態度、倫理的事項、基礎的知識および技術を学び、心理的支援の実際について理解を深め、支援を実践していく力を養う。学外施設では実習先の指導担当者および大学の実習担当教員（各実習施設の指導を担当する巡回指導教員）による指導のもとに実務を体験し、実践を通じて心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務などを学ぶ。 <学習目標> ・心理臨床とその近接領域に関する専門知識および基礎となる対人関係能力をふまえて、さまざまな臨床場面、多様な対象に適切に臨むことができる。 ・心理臨床の実務を体験し、心理的支援、多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務について理解することができる。	
授業の進め方	【授業】 授業については、臨床心理実習Ⅰ－④内で行うものとする。 【学外実習】 <実習期間・内容> ・臨床心理実習Ⅰ－③、④の実習に加えて、更に学外実習施設における実習を希望する者に対して行う。公認心理師資格を受験する場合は必修科目である。 ・原則 1 箇所、実習施設ごとに指定された日程で、10 日間（毎週の継続、または連続した日程・1 日 6 時間程度）の実習を行う。 ・実習生は、支援に必要な知識・技能の基礎的な理解の上に、（ア）から（オ）の事項について、見学だけでなく、心理に関する支援を要する者等に対して支援を実践しながら、実習指導者又は実習担当教員（巡回指導教員）による指導を受けて修得していく。 （ア）心理に関する支援を要する者等に関するコミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援等の知識及び技能の修得 （イ）心理に関する支援を要する者等の理解とニーズの把握及び支援計画の作成 （ウ）心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ （エ）多職種連携及び地域連携 （オ）臨床心理士及び公認心理師としての職業倫理及び法的義務への理解 <実習準備・実習指導> ・実習先が決まった実習生は、「実習の手引き」（授業内で配布）を熟読し、事前準備や実習計画書の作成を行い、実習担当教員（巡回指導教員）から、学外施設への実習事前訪問に関する打ち合わせや指導を受ける。 ・実習生は、学外実習施設の実習指導者および実習担当教員と、事前訪問による打ち合わせ（実習オリエンテーション）や施設見学を行う。 ・実習期間中は、学外実習施設の実習指導者の指導を受けて施設実習を行い、実習報告を毎回作成すると同時に、実習担当教員による実習指導や施設での訪問指導を受ける。訪問指導は 10 日間の実習の場合、5 回につき 1 回、計 2 回受ける。	

	<参考> 公認心理師の資格取得を目指す場合には、以下の実習時間が必要とされる。2年間で原則、下記の領域および時間数を行うものとする。 ・学外施設での担当ケースに関する実習の時間は90時間以上とする（なお、学内実習と合わせた担当ケースの実習時間数は270時間以上とする）。 ・実習施設は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の5分野うち、医療機関は必須とし、3分野以上の施設において実習を受けることが望ましい。医療機関以外の施設においては、見学を中心とする実習も含む。
事前学習の内容 学習上の注意	・学外実習は原則毎週の継続、または連続した日程で行うこと ・各実習先に必要な基礎知識や心理検査技法を事前に勉強しておくこと
本科目の関連科目	臨床心理実習Ⅰ－②、臨床心理実習Ⅰ－③、④
テキスト	実習中心の授業のため、特に指定しない。
参考文献	・津川律子・橘玲子編『臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド』誠信書房、2022 ・津川律子・篠竹利和『シナリオで学ぶ医療現場の臨床心理検査』誠信書房、2010 ・鑪幹八郎・名島潤慈『心理臨床家の手引[第4版]』誠信書房 2018 ・滝川一廣『子どものための精神医学』医学書院、2017 ・一般社団法人日本公認心理師養成機関連盟編『公認心理師養成の実習ガイド』日本評論社、2019 ・東畑開人『居るのはつらいよーケアとセラピーについての覚書』医学書院、2019 ・窪田彰『精神科デイケアの始め方・進め方』、2004 ・窪田彰編『多機能型精神科診療所による地域づくり チームアプローチによる包括的ケアシステム』、2016 ・日本精神科病院協会監修 岸本年史編著『精神科研修ハンドブック』2005 海馬書房 ・笠原嘉著『予診・初診・初期治療 精神科選書Ⅰ』2007 星和書店 ・全国情緒障害児短期治療施設協議会編『心をはぐくむⅢー総合環境療法の臨床ー』2002 ・森田喜治『児童養護施設と被虐待児ー施設内心理療法家からの提言』創元社 2006 ・橋本和明『虐待と非行臨床』創元社 2004 ・黒田美保著『これからの発達障害のアセスメント：支援の一步となるために』、金子書房、2015
成績評価 方法と基準	以下のAの項目が達成されていることを条件とし、Bの各項目について評価して総合評価60点以上を合格とする。 A：①事前・事後の授業での発表、②1箇所10日程度での施設での実習 B：①事前学習による実習施設の理解、事前準備や打ち合わせでの積極的調整。②心理的支援の基本的態度・知識・技術の修得。多職種連携、地域連携、職業倫理と法的義務等についての理解。 ③実習態度（社会性・責任感・主体性・協調性・関係づくりなど）。④実習日誌等の実習記録の適切な整備。⑤実習報告書の内容と発表、実習体験の振り返りと自己の課題の理解

□医療・福祉専門科目

科目名	ソーシャルワーク論 ※本科目は認定社会福祉士認定制度の認証科目（共通専門／ソーシャルワーク理論系科目群Ⅰ）です。	2単位
担当者	田中 千枝子（非常勤教員）	
開講形態	対面形式	
テーマ	ソーシャルワークを理論や方法論として学び、事例研究やロールプレイやカンファレンス体験などを通じて理解する	
科目のねらい	<キーワード>①ソーシャルワーク ②実践理論 ③社会福祉方法論 ④ミクロ・メゾ・マクロ実践 ⑤専門性 <内容の要約>ソーシャルワーク実践の基盤となる考え方や方法を示すソーシャルワーク実践理論やアプローチに関する基本的知識や支援観や視点を得ることによって、特にミクロからメゾレベルのソーシャルワークの専門性の確認をする。また実践事例を分析し、グループ作業によりコミュニケーションをはかる体験をすることで、価値に基づく知識・技術を検証し、さらにそれを専門職のコンピテンスとして身に着けるために集団学習およびレポート作成によるセルフワークによる学習を行う。 方法としては、実際の事例に対して様々な教育的手法により実践理論・モデル・アプローチを適用し、参加型授業によって個人・集団・地域等一定の視点からの事例の展開を観察し理解し分析し、解釈および評価するプロセスを追い、事例検討の流れを体験する。 <学習目標>人の生活/人生に着目し、社会的枠組みにおいて福祉の課題を設定し、その科学的視点を身に着けることによって、ソーシャルワークの実践方法を理解し、組織・地域・制度に対して、働きかけることができる。ソーシャルワークの理論や展開過程を問題解決に応用する能力として身に着け、多職種に対するコミュニケーションやプレゼンテーション等のマネジメントスキルの研鑽に役立てることを目的とする。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 授業契約 第 2 回 SWの実践理論概論講義 第 3 回 援助観・価値観の理論的変遷 事例による検討 第 4 回 統合理論の概観 事例による検討 第 5 回 バイオ・サイコ・ソーシャルモデル ロールプレイ 第 6 回 エコシステム論と時間：空間的把握 エコマップ・タイムライン作成 G作業 第 7 回 ピンカス・ミナハンの4つのシステム理論、地域における多職種他機関連携を意識したエコマップ・タイムライン作成 G作業 第 8 回 GWに関する基礎理論概観 チームアプローチ協働の型 ロールプレイ 第 9 回 グループ力動論、司会の技術、事例検討、ロールプレイ KJ法によるGW 第10回 課題に対するプレゼンテーション技術 ディスカッションとリーダーシップ 第11回 地域福祉の技術と評価 調査研究 第12回 エンパワメント評価法 ワークショップのロールプレイ 第13回 SWリサーチ 介入計画の作成 第14回 ミクロ・メゾ・マクロに展開するSWとマネジメント レポート 第15回 グループ発表、まとめ、レポート作成	
事前学習の内容・学習上の注意	○前もって社会福祉学の基礎的な理論や概念の知識（教科書程度）を確認しておくこと ○ディスカッションやロールプレイなどG作業や演習形式を多用するので、積極的に参加すること ○専修や専攻を超えて様々な立場の学生が集まるので、多くの仲間を作るようにすること ○集中講義3日間 午前と午後計6回の授業内レポートを課し、理解の内容を確認する	
本科目の関連科目	医療・福祉マネジメント研究科「専門演習Ⅰ・Ⅱ」の考え方や論文作成の枠組みや問題提起に寄与する。なお本科目は「認定社会福祉士」の資格付与対象科目として認定されている。	
テキスト	木村容子・小原真知子編 「ソーシャルワーク論Ⅱー理論と方法ー」法律文化社 2023	
参考文献	渡部律子『福祉専門職のための統合的多面的アセスメント』ミネルヴァ 2020 ブトユリム・Z 『ソーシャルワークとは何か』川島書店 1986 その他資料配布	
成績評価方法と基準	集中授業3日間で、午前・午後の2回×3＝6回 レポート提出 60% ディスカッションやロールプレイへの参加度 40% 総合評価により60点以上を合格とする。	

□医療・福祉実践科目

科目名	多職種連携概論	2 単位
担当者	篠田 道子（非常勤教員）	
開講形態	ハイブリッド形式	
テーマ	多職種連携の視点から医療・福祉サービスのマネジメントを考える	
科目のねらい	<キーワード> 多職種連携、マネジメント、組織変革、リスクマネジメント、意思決定支援 <内容の要約> 少子高齢化や情報化の進行とともに、医療・福祉サービス、組織やチーム、リーダーシップのあり方が変化している。本講では多職種連携の視点から医療・福祉サービスのマネジメント（管理・運営・経営）を考える。ケースメソッド、事例検討など複数の方法を組み合わせながら多面的に検討する。授業では様々な多職種連携の場面にスポットを当て、自分がその場面の当事者であればどのように状況を理解し、そしてどのように意思決定し、組織やサービスを動かしていくのかを考える。 <学習目標> ・多職種連携の必要性とその実際を理解できる ・医療・福祉サービスのマネジメントを理解できる ・多職種連携の課題をミクロ・メゾ・マクロの視点から説明できる	
授業の進め方	第1・2回 オリエンテーション、自己紹介、多職種連携を高めるカンファレンス（ブレインストーミング、ケース教材によるディスカッション） 第3・4回 医療・福祉施設におけるリスクマネジメント 第5・6回 医療・福祉施設における組織変革 第7・8回 業務改善と働き方改革（院生による事例提供と討論） 第9・10回 小規模事業所の事業承継 第11・12回 多職種で支える意思決定支援 終末期ケアに焦点を当てて - 第13・14回 静かなリーダーシップ（グループワーク＋発表） 第15回 全体のまとめ・リフレクション 本講義は、隔週2コマ連続とする。都合により内容と順番を一部変更する場合がある。	
事前学習の内容・学習上の注意	・事前に配布したケース教材を読み、課題シートに自分の考えをまとめ、グループワークで発言できるように準備しておくこと。 ・授業では双方向性を大切にしているので、院生の積極的な問題提起を歓迎したい。	
本科目の関連科目	ケースメソッド基礎、ケースメソッド演習	
テキスト	テキストは使用しない。レジュメ、ケース教材、実践報告、雑誌論文、新聞記事など多様な教材を使用する。	
参考文献	・篠田道子（2011）『多職種連携を高めるチームマネジメントの知識とスキル』医学書院 ・篠田道子（2023）『チームを成長させる会議・カンファレンス 35 スキル』日本看護協会出版会 ・J.バダラッコ、高木晴夫監修（2010）『静かなリーダーシップ』翔泳社	
成績評価方法と基準	・最終レポート（50点）、②平常点（50点）：コメントカード、事前課題、グループワークへの参加状況等で評価し、総合評価60点以上を合格とする。 ・最終レポート：テーマは授業で扱う内容に関連するものを各自テーマ設定する。A4版で2000字程度にまとめる。締め切りは2026年7月31日（金）。nfu.jpに提出する（授業初日に説明する）。	